

ヨセフスのモーセ物語について

秦 剛 平

先に筆者は、「古代世界におけるモーセ像とヨセフス」と題する論文を John G. Gager, "Moses in Greco-Roman Paganism" (Abingdon Press, 1972) を下敷にして著わし、⁽¹⁾「ペンライズムとヘレニズムの研究誌『パディラヴィウム』」に発表した。

この小論において筆者は、モーセがヘレニズム・ローマ時代の異邦人世界でもっともよく知られたユダヤ人であったこと、そのひとつの理由は、モーセや出エジプトについて言及したり創作したりする著作家たちが少なくなかったためだと指摘し、その人たち、すなわちヘカタイオス、ポセイドーニオス、ストラポーン、ポンペイウス・トルガス、クインティリアヌス、タキトゥス、ユエナリウス、マネトーン、リュシマコス、カイレーモーン、アピオン他の著作（あるいは著作断片）を、時代的・地理的、あるいは背後の著作目的から順次検討してみた。

これは、ヨセフスがモーセ物語を異邦人世界に向けて記述するにあたり、この人たちの存在、中でもアレクサンドリアやローマの悪質なる反ユダヤ人主義者たちの存在とその言論活動を意識していたことを論証するための準備作業のようなものだった。

ヨセフスは『ユダヤ古代誌』二巻一〇一—四巻三三一まで、すなわち旧約時代篇の相当部分を費してモーセの生涯

とその事蹟を記述する。このこと自体がすでにして、反ユダヤ人主義者と対決するヨセフスの並々ならぬ覚悟を示しているように思われるが、本小論では、一、モーセの出生物語、二、モーセの幼少時代、三、モーセのミデヤン逃亡事件、四、モーセによる出エジプトと荒野での彷彿、五、モーセの律法についての、ヨセフスの記述を見ていきたい。

一

出エジプト記二・一—一〇によれば、母は産みおとした見目形のいい男子を三カ月の間隠しておいたが、隠し切れなくなると、ついにバピルスの籠の中にいれナイル川の岸のあしの中に置いておく。そして運よく、水浴みに来たパロの娘に発見され、保護される。男子の姉は乳母を紹介すると言って、母をパロの娘のもとへ連れて来る。母はパロの娘から報酬をうけながら、わが子を育てあげ、成長するに及んで引き渡す。

祭司伝承によれば、父の名はアムラム、母はヨケベデで、三歳年上の兄アロンがこの男子にはいた。⁽²⁾見られるように、わたしたちに馴染みの深い出エジプト記のモーセ誕生物語は単純である。

では、ヨセフスはこの誕生物語をどのように扱うか。

彼はまず、それを語る前に、エジプトの神殿書記による出生予言と、父アムラムにたいする神の啓示を物語として創作する。

前者について、ヨセフスは言う。

「神殿書記——彼らは将来のことを語るにすぐれた能力をもっていた——の一人が、王に次のように報告した

のである。すなわちそのとき、イスラエル人に一人の男子が生まれるが、もしその子が成人すれば、彼はエジプト人の力（「ヘゲモニア」）を弱めてイスラエル人の地位を高め、万人にまさる立派な徳（「アレテー」）で不滅の名声を得るであろう」と。

ここでの出生予言は、イスラエル人の増大に脅威を感じ、そのため誕生してくる男子の虐殺を命じたパロの動機および、生まれてくる男子が凡々たる人物ではなく、出生前からすでに選ばれた者だったことを間接的に説明する⁽⁴⁾。そして、次に紹介するその子の父アムラムにたいする神の啓示はより具体的である。

「……その子の出生にエジプト人が恐怖を感じ、そのためイスラエル人から生まれてくる子は一人残らず殺戮するよう命令まで出させたのは、実はおまえが生む子だ。しかしその子は、彼を殺そうと監視している人びとの眼を逃れ、驚くべき仕方方で育てあげられ、ヘブル人の種属をエジプト人の束縛から解放し、その名は全世界が統くかぎり、ヘブル人の間ばかりではなく外国人の間でも忘れられないものになる。」⁽⁵⁾

ここでの神の啓示は、モーセがパロの圧制下に苦しむヘブル人の解放者たるべく生まれてきたこと、しかもそれが神の摂理のうちにある出来ごとだったことを明確に説明する。ここで注意しておきたいのは、訳文中で「驚くべき仕方」で〈と訳出したギリシア語 *ἄσπετος* の用法である。これは副詞であるが、その形容詞 *ἄσπετος* が *ἄσπετος* の合成語であることから知られるように「人間の思いを越えた」の意であって、ヨセフは、神の意志が具体的に働いたと見なす出来ごととか行為に言及するさいしばしば用いる。⁽⁶⁾ モーセは神の意志にしたがって誕生したが、その明白な証拠は、そののちの出来ごとからも帰結されるというわけである。

いやヨセフは、モーセの誕生時からして、神の意志がすでに働いていたことを、次のような仕方ですべてに納得さ

せようとする。

「彼女（ヨケベデ）は、はげしい陣痛を伴わなかったために静かに分娩することができ、その結果、うまく監視の眼を逃れられた。」⁽⁷⁾

出エジプト記二・二は、ヨケベデの無痛分娩については全くふれていない。

嬰子モーセのナイル川への遺棄とパロの娘によって救われた物語の大筋は出エジプト記にしたがう。もちろん、そこでの一連の出来ごとは、「バラドクソス」の出来ごとの範疇におかれる。

出エジプト記ではその名が伏せられているパロの娘にテルムーティスなる名が与えられるが、ヨセフスによれば、彼女が嬰子モーセに救いの手を差しよべたのは、パピルスの籠の中におかれていた嬰子の「見目形のあまりの美しさに、一眼ですっかり魅了されてしまったから」⁽⁸⁾だそうである。

出エジプト記二・二は、ヨケベデの生みおとした子の容貌に言及しているが、同書二・六によれば、パロの王女が籠の中の嬰子を憐れんだのは、それがそのとき泣いていたからであって、彼女がその子の容貌の虜になったからでは決していない。ヨセフスにあっては、容貌のよさは旧約物語に登場する英雄たちの必要条件であるが、モーセの場合にそれがことさらに強調されるのは反ユダヤ人主義者たちが描く、醜悪なレブラ患者モーセ像があったからである。⁽⁹⁾

二

出エジプト記は、モーセの幼少時代を空白とする。

ヨセフスのモーセ物語について

しかし、ヨセフスは次の言葉でそれを埋める。

「彼の理解力の発達は、身体の発達に伴うのではなく、同年の者の標準をはるかに抜いていた。彼の慎重な大人じみた特質は遊び（パイディア）のときによく發揮されたが、そのころの行動にはすでに、成人後の彼がなした大きな功業を約束するものがあつた。

三歳になると、神の意志により、彼の身体的發育はめざましいものを見た。モーセを一睨みたる者はみな彼の器量のよさに打たれ、その美しさを話題にした。そして、公道を歩いていて彼に出会つた人が、そのかわいらしい容貌にしばらく見惚れて、大事な仕事をしばしば忘れてしまうことがあつた。まことに、この子の完璧ともいふべき純粋な魅力は、それを見る者にとっては蠱惑的だつた。⁽¹⁰⁾」

ここに見られるヨセフスの穴埋め作業は、欠落した都市名や人名を補つたり、軍隊の兵数や戦場での死傷者数を埋めていく作業と一見似たものであるが、その動機はもっと積極的である。幼児モーセの「理解力」と「器量のよさ」が強調されているからである。そして、モーセの「理解力」のよさを示す例は、さらに具体的なエピソードを創作することで説明される。

ヨセフスによれば、モーセを養子にしたテルムーティスは、ある日、モーセを父王に引きあわせる。父は娘の機嫌をとろうとして、王冠を幼児の頭上におくが、何とそのときのモーセは「王冠をもぎとり、あどけない仕草ではあつたが、それを地面にたたきつけ、両足で踏みつけてしまった⁽¹¹⁾」というのである。

並みの子とは異なる、いかにも神童モーセにふさわしい立居振舞いであるが、ここには後年の出エジプトという使命にたいする幼児モーセの「理解力」がすでに暗示されているのである。そしてモーセの「理解力」は、成人後もま

すまず磨きがかけられ、それは「古今東西の人びとにまさっている」⁽¹²⁾となる。

さて、この光景に仰天したのは、前出の神殿書記である。書記は即座に、危険人物に成長する可能性を蔵したモーセを殺害しよう王に進言する。しかし、テルムーティスがすばやく王の手から幼児を奪い返したため、王は殺しそびれてしまったという。「王がそのとき躊躇したのは、摂理によってモーセの身の安全を護っておられる神が、そのように仕向けられたからである」⁽¹³⁾。

幼児モーセが危局から救いあげられたのは、神の意志が働いた「パラドクソス」な出来ごとなのである。

三

出エジプト記二・一一―一五によれば、成人後のモーセにとって特筆大書に値する最初の大事件は、同胞の一人を打擲したエジプト人を殺害し、砂中に隠した事件である。

近代社会ならずとも古代社会においてもまた、殺人と死体遺棄罪が適用されてしかるべき犯罪であるが、ヨセフスはこの事件にふれない。アレクサンドリアを中心とする当時の反ユダヤ人主義者の反モーセ感情を知悉しているヨセフスにとって、これは記すにはなだ困惑する事件だったからである。

出エジプト記二・一五以下によれば、パロは殺人の下手人モーセを殺害しようとし、そのためモーセはミデヤンの祭司のもとへ難をのがれ、やがて、その祭司の七人の娘の一人と結婚して、ミデヤンへの逃亡事件は大団円でおわる。ここでのヨセフスは迂回作戦に出る。すなわち彼は、モーセの殺人事件が占める大きな紙幅を、アレクサンドリア

のユダヤ人共同体で成立したと推定される伝説を援用して埋め、モーセの結婚物語に到達する。

ヨセフスが利用する伝説の骨子はこうである。

あるとき、エチオピア人がエジプトに侵入し、彼らの財物を略奪していった。侮辱されたエジプト人は遠征軍を送り込むが敗北を喫し、追撃をかけられ、再度の侵入をうけてメムフィスや海岸地帯にまで進出されてしまう。このとき、モーセを同盟者にせよという神官たちの占いにより、モーセはエジプト軍の指揮官に任命される。モーセはさまざまの蛇類が棲息する内陸部を蛇類の天敵であるときを放ちながら行進し——ここでもモーセの「理解力」、すなわち頭よさが強調される——、突然エチオピア人の前に姿をあらわして彼らを大量に殺戮し、ついにはエチオピア人を王都サバに追い込んでしまう。そしてそのとき、城壁の近くで勇敢に戦っているモーセを見たエチオピアの王の娘タルビスははげしい愛情を抱き、結婚を申し入れる。モーセは、町の明け渡しを条件に彼女と結婚し、エチオピア人に微罪を加えた後、エジプト人を率いて帰国する⁽¹⁴⁾。

この伝承を利用するヨセフスの歴史家としての誠実さはともかくとして、ストラテジストとしての才は非凡である。なぜなら彼はここで、モーセの英雄譚として伝説を活用する一方、そこに、ミデヤンへの逃亡の新しい動機を巧みにもとめたからである。

ヨセフスは次のように書きすすめる。

「エジプト人たちはモーセのおかげで窮地を脱したが、かえってこのために彼にたいする憎悪心を新たにし、彼の生命を奪う計画をいちだんと熱心にすすめていった。彼らは、彼が今回の成功を利用してエジプトで革命をはかるのではないかと懸念し、また王にたいしては彼を殺すようにと示唆した。いっぽう王も、モーセの指揮官

としての能力にたいする嫉妬と、自分の權威の失墜にたいする不安から同じように考えており、神殿書記に唆かされると、モーセ殺しの計画にすすんで手を貸した」

見られるようにここでは、凱旋將軍モーセの卓越した指揮能力を賞讃すると同時に、その能力ゆえに一般のエジプト人と王がモーセにぶつけた憎悪心というものを紹介する。これではモーセもミデヤンの地へ遁走しないわけにはいかなくなる。

なお、これは先へ進んでからの話であるが、エジプトの新王にたいしてもとめられる出エジプトの許可願いは、このときのモーセの輝かしい功業にたいする成功報酬として要求される。⁽¹⁶⁾

四

モーセはシナイオン山の燃えるいばらの中から、ヘブル人の解放という召命をうける。

そのとき発せられた人語は、神が彼とともにおり、彼が「人びとの間で栄光と名譽を手にする」ことを予言し、彼がエジプトの地へ帰って同胞ヘブル人の「指揮官」(Ⅱストラテegos)、「総師」(Ⅱヘゲモン)として行動するよう命じる。アブラハムがかつて任んでいた約束の地に同胞たちを導き、彼らに幸福を与えることの出来るのはただモーセだけであり、またモーセの「理解力」であることを人語は説明する。

モーセは与えられた使命に怯えるが、神は奇蹟をあらわして彼を激励する。そしてその結果彼は、神がまちがいない自分の「保護者」(Ⅱパラスタテース)であることを知り、己れの使命を自覚する。

「同胞の自由の獲得」のために挺身することになる、指揮官モーセの誕生である。

出エジプトを妨害する新王のため、エジプトは十の災禍を蒙る。ヨセフはそのうちの九つを語る。

エジプトに次々と見舞った災禍のため、新王もついに出国を許可する。出エジプト記一二・三五―一六によれば、そのときのヘブル人は「エジプト人から銀の飾り、金の飾り、また衣服を請いもとめた。……こうして彼らはエジプト人のものを奪い去った」が、ヨセフはここに見られる同胞たちのこじき根性を注意深く避けてとおり、その出立をあくまでも堂々としたものにする。ヨセフは言う。「エジプト人の中には、餓別をおくってヘブル人をたたえる者もいた。一刻も早く立ち去ってもらいたいためにそうした者もいれば、古くからの知己としての隣人愛からそうした者もいた」と。そしてモーセの一行は、「彼らを虐殺したことを悔い嘆くエジプト人たちを後にして」⁽¹⁷⁾エジプトを出発する。ときにモーセ八十歳である。

紅海を渡渉した一行は、シナイ山へ向けて行進する。そしてそこで、十戒が授与され、幕屋が造営され、大祭司が選ばれ、律法が与えられるが、ヨセフは、そこにいたるまでの砂漠の中の行進を率いるモーセを、卓越した、有徳の指揮官として描く。

すなわち、人びとの不満が昂じて爆発すれば、モーセは独特の説得力をもって、彼らがうけた神の恩寵を想起させ、どこまでも神の摂理を信じていくよう訓戒し、そうすることによって彼らの怒りを鎮め、悲嘆のどん底から救いあげ、苦難の運命を打開していく。⁽¹⁸⁾そしてそのために挿入されるモーセの演説は、出エジプトに見られる片言隻語をもとにしたヨセフの創作である。神はシナイ山でモーセに「言葉が必要なときには説得力をかしてやろう」と言っている。⁽²⁰⁾その使命を自覚させたが、まさにこういう場面で冗舌の男ヨセフは、神に代ってもモーセに言葉をかしているのではあ

る。

モーセはシナイ山で、義父リウエルの勸告にしたがって軍団を分割し、それぞれの部隊長に指揮権を移譲し、以後、総指揮官の地位につく。このように軍団を編成したリウエルの名は出エジプト記一八・一以下に書き残されているが、ヨセフはここで、そのような措置を自分の手柄とはせず、リウエルに帰した人間モーセの誠実さを強調する⁽²¹⁾。シナイ山を出発してエリコに入るまでの、荒野における四十年の試練と前進でも、モーセはその崇高な目的のために雄々しい情熱を傾けてやまない指揮官として描かれる。

たとえば、シナイの荒野のハゼロテに到達したときの一行は、それまでの彷徨中に耐えねばならなかった試練に不平・不満を鳴らす⁽²²⁾、パランの荒野で、カナンの土地征服の困難なることを知って人びとは反乱をおこす⁽²³⁾、カナン人の戦争後、人びとは無規律・不服従となって反乱をおこす⁽²⁴⁾、ミデヤン人の女たちに誘惑された若者たちの放埒が原因で軍団内に反乱がおこる⁽²⁵⁾が、その都度モーセは、その説得力で、自制心を欠く同胞たちに語りかけ、自暴自棄の状態から救いあげては立ち直らせるといった稀有の名指揮官である。

したがって、こんな調子で描かれるモーセであるから、モーセとその一行にとって不都合な、出エジプト記にみられる記事は省略される。たとえばシナイ山麓での仔牛鑄造事件⁽²⁶⁾である。

モーセは、その死に先立って人びとに律法と統治原理と書きしるした一巻の書物を与え⁽²⁷⁾、カナン人のもとへ向けて遠征する彼らを祝福する。

そしてその際、ヨセフスはモーセに告白させる。

「……こうしたすべてのことの先導役をはたされ、最後にみごとな成果をわたしたちに与えて下さったのは、

ヨセフスのモーセ物語について

神ご自身である。わたしは単なる副官（『ヒュポストラテウゴス』）で、神がわたしたちの民に分かたれたもろもろの幸福の下働き（『ヒュペレテース』）にすぎない……⁽²⁸⁾と。
神の前に、あくまでも己の分を弁えたモーセなのである。

五

ヨセフスは、民族の統治原理に関してモーセが書き残した律法の諸規定を、四卷一九六―三〇一において紹介するが、それに先行する三卷二二四―二八六でも「潔めと供儀に関する二、三の規定」と断った上で、主としてレビ記の規定を紹介する。

レプラについての律法はレビ記一三―四章によるが、ヨセフスはそのに見られるレプラの症状についての克明な描写、患者の取り扱い、治癒された場合の煩瑣な潔めの儀式についての一々の規定には言及しない。しかし彼は、モーセが「レプラ患者や伝染病をもつ者を町から追放したこと」、しかもその追放は「徹底しており」、ひとたび追放された患者は「他人との交渉は許されず、患者は一個の屍体と変らなかつた」⁽²⁹⁾ことを力説した上で、当時の世界に広く流布されていたモーセレプラ患者説にはげしい反論を加える。

ヨセフスは次のように言う。

「これらすべてのことから判断すれば、モーセがレプラを患いエジプトから逃げ出さざるを得なくなり、エジプトを同じ理由で追放された人びとを指揮し、彼らをカナンへ導いた、などと説く連中の話がいかにたわいない

か、よく理解できるだろう。

なぜならその手の話が真実であれば、モーセが自分に不名誉なこのような律法を制定するはずがなく、もし他の人たちがそのような法律を取り入れれば、おそらく彼はそれに抗議したに相違ないからである。彼らは侮辱と追放をうけるわけではなく、それどころか、もっとも輝かしい遠征を行い、政治の重要な地位につき、また聖なる場所や聖所に入ることが許されている。

したがって、もしモーセと彼にしたがった大ぜいの者がこの種の皮膚病を患っていたのであれば、彼はレプラ患者にたいしてこれほど苛酷ではない、もっとはるかに有利な律法をつくったはずである。

要するに、わたしたちに向けられたこのような話は、彼らの嫉妬心から生まれたものであり、モーセには全くこの種の病歴はなく、彼が交った同胞も同様であったことは、きわめて明白である。

モーセがレプラ患者についてこのような律法をつくったのは、彼が神の栄光のためにそうすべきだと信じただけにすぎない」と。

六

見られるとおり、ヨセフスの描くモーセ像は、ユダヤ民族の英雄として徹底的に美化されている。

その誕生物語においては出生予言と神の啓示が語られ、モーセ自身、いうなれば「神の子」にまで格上げされ、その幼少時代の空白は埋められ、成人後になした殺人事件は隠蔽され、代りにエチオピア遠征で功業をたてたモーセが

紹介され、六〇万の同胞を率いての出エジプトでは古今東西にその例を見ない卓越した指揮官であったとされるが、なぜヨセフはこうまでして民族の英雄を描かざるを得なかったたのであろうか。

『ユダヤ古代誌』全二〇巻は、周知のとおり、ユダヤ戦争（六六―七三）後に著作された『ユダヤ戦記』七巻につづくもので、その著作年代は七五―九〇年頃である。

この時期ヨセフは、戦勝国ローマの皇帝の庇護のもとにおかれてはいたものの、彼の周囲には、あるいは彼が入りするローマのユダヤ人共同体には、戦争捕虜として連れて来られて釈放された者や廃都エルサレムからの亡命者たちが多数おり、またアレクサンドリアや小アジアのユダヤ人共同体にも新しいディアスポラのユダヤ人が多数流れこんでいた。そして、この敗北民族がそこで知ったのは、彼らの宗教・道徳・国民性にたいする攻撃であったが、そのための反ユダヤ人的言論活動は一時的にこの民族にたいしてなされたのではなくて、実は、すでにプトレマイオス朝後期からはじまる長い歴史をもつもので、その者たちの最大の攻撃目標は、ユダヤ民族の英雄モーセに絞られていた。⁽³⁾モーセおよびモーセに率いられたユダヤ人の先祖たちはレブラを患った賤民の集団にすぎなかったという言論活動は、一世紀の後半においてなお盛んであった。そしてそのためヨセフは、この者たちの存在を念頭に入れて、新しいモーセ像を異邦人世界に向けて描いて見せなければならなかったのである。

註

(1) 『ペデイラヴィウム』一八号（一九八三・十二月）掲載。

(2) 出エジプト記六・二〇参照。

(3) 拙訳『ユダヤ古代誌』（山本書店）二・二〇五参照。

(4) ヨセフがここで出生予言をした人物を神殿書記として

いるが、その意義は案外、看過されているように思われる。

もちろん、神殿書記を登場させたのは――彼らは神官団の底辺を構成する者たちではなく、宮廷への出入りを許された者

たちである——、モーセの出生予言を権威づけるためであつたらうが、ヨセフスが後年著した『アピオンへの反論』中で論敵とした、たとえばマネトーンはモーセをヘーリオポリスの神官(二・二三八、二五〇)、カイレーモンはイシス神殿の書記(二・二九〇)、アピオンはヘーリオポリスの神官(二・一〇〇)としているからである。

(5) 『ユダヤ古代誌』二・二二五—六参照。

(6) ギリシア語 *καταλόγος* の用例は、ヨセフスの全著作中五一例認められるが、そのうちモーセの場合は、『ユダヤ古代誌』二・二三三、二六七、二九五、三四五、三・一、一四、三〇、三八を参照。同様に五・二八、九・一四、五八、六〇、一八二、一〇・二二四、二三五をも参照。「パラドクソス」が「運命の女神」と結びつけられた場合は、『戦記』四・二三八、六・六三に見られる。同義語 *καταλόγος* が用いられたモーセの場合は、『ユダヤ古代誌』二・三三九、三・一六、四・六六その他、六・二八二、七・一五七、一〇・二八をも参照。

(7) 『ユダヤ古代誌』二・二二八参照。

(8) 前掲書二・二二四参照。

(9) 前掲書二・二三一、三・一三参照。『ミドラシ・ラバ』出エジプト記二・一〇に「ファラオの娘は、もはやモーセを王の宮殿から出て行かせるようなことをしなかった。という

ヨセフスのモーセ物語について

のも彼が美しく、すべての者が彼をひと目見たかったからである。そして事実、彼を見た者はすっかり見惚れてしまふのだった」とある。

(10) 『ユダヤ古代誌』二・三三〇—三一参照。

(11) 前掲書二・二三三参照。

(12) 前掲書四・三二八、なお、二・二四四、三・一二でもモーセの総明さは強調されている。

(13) 前掲書二・二三六参照。

(14) 前掲書二・二三九—二五三参照。この物語は、「エチオピア人のエジプト侵入とモーセの遠征」と「エチオピア娘とのモーセの結婚」についての二つの伝説が一つにされたものである。前者は、エウセビオスの『福音の備え』九・二七に保存されているアルタバノスの断片により、アレクサンドリアを中心に広く語り伝えられていたことが知られる。なおヨセフスはこのこと、エチオピアの娘との結婚物語を入れてしまったため、そしてミデヤンの祭司リウエルの娘チッポラとの結婚物語(二・二五八—二六三)を僅か数節先で語るため、少なくとも、近代の読者には不自然な印象を与えるという失敗を犯している。

(15) 『ユダヤ古代誌』二・二五四—五参照。

(16) 前掲書二・二八二参照。

- (17) 前掲書二・三三四参照。
- (18) 前掲書二・三二五参照。
- (19) 前掲書二・三二七以下、三・一一以下参照。
- (20) 前掲書二・二七二参照。
- (21) 前掲書三・七三以下参照。三・二二二以下でも、モーセは、ひたすら神への奉仕に専念し、普通人の風彩で一人として振舞い、つねに人びとの利害だけを考える人物、人びとが与えようとする名譽は断わる人物として描かれている。なお四・一五六をも参照。
- (22) 『ユダヤ古代誌』三・二九五以下参照。
- (23) 前掲書三・三〇六以下参照。
- (24) 前掲書四・一一以下参照。
- (25) 前掲書四・一三一参照。
- (26) 出エジプト記三二・一以下になれば、モーセがシナイ山に登っている間、彼の率いた民は、金の仔牛をつくりそれを神とした。そして彼らは、その前に祭壇をつくとそこに犠牲を捧げたが、そのため下山したモーセは烈火の如くに怒り、携行して来た十戒の石板を砕き、彼らがつくった仔牛をこなごなに砕いた。これは民の不信仰を物語る大きな事件であるがヨセフスはそれにふれない。
- もちろん彼は、モーセがシナイ山へ登った経緯、下山がおく

- れたために生じた人びとの不安、そのための対立といったものは物語として創作するが、その物語は「こうして四〇日と四〇夜がすぎたとき、この間ぶつうの人間の口にするようなものは何一つ食べていなかったモーセがついに帰って来た。もちろん全軍は歡喜に満たされた」(『ユダヤ古代誌』三・九九)でしめくられてしまう。ヨセフスがここで金の仔牛鑄造事件を省略したのは、ユダヤ人たちがエルサレムの神殿内で黄金のろばの頭を安置し、それを礼拝していると悪質な中傷を流した、一・二世紀の反ユダヤ人主義者、たとえばムナセアス、ポセイドーニオス、アポローニオス・モロン、さらにローマの知識人タキトゥス等が念頭にあったからだと思われる。『ペディアライウム』第三章参照。
- (27) 前掲書第四章参照。
- (28) 『ユダヤ古代誌』四・三二七。
- (29) 前掲書三・二六四。
- (30) 前掲書三・二六五、二六八。
- (31) 『ペディアライウム』参照。